

## 説教の心得

—明治期の説教に学ぶ—

佐々木大樹

### 一、はじめに

仏の教えを他に伝えることは、仏教者にとって必須の行為である。このことは釈尊が成道後の四五年間を、遊行伝道に費やされた事績からも明らかである。

本宗においても、「本宗の教化は、全宗門人がこれを行わなければならない」（宗法第九条）と規定し、檀信徒の安心体得のため、「行法、法要儀式、言説、詠歌、放送、文書、映像及び各種事業の他、時宜に適した方法」（「教化規程」第一条）を行うとしている。昨今はインターネットの普及により教化方法の多様化が著しいが、それでもなお「言説」、すなわち僧侶が人前で仏教を説く意義は大きく、一定のニーズがあるものと推測される。

その反面、僧侶が修道過程で、仏教の説き方について体系的に学ぶ機会は少ない。多くの場合、他のやり方をまねて、手探りながら説教しているのが実情ではないかと思う。現代でも話し方に関する書籍は多数出版される

が、必ずしも仏教を説くのに適しているとは言いがたい。

そこで本論では、明治期に出版された各種の「説教学」に注目し、仏教を説く上での心得や話法について、現代応用を視野に入れつつ取りまとめゆきたい。なお、仏教を説くことは古来、説教・説法・布教・法話等の名称で呼ばれてきたが、本論では、やや形式的な性格が強い「説教」を中心に論じてゆきたい。<sup>(1)</sup>

## 二、明治期と「説教学」

明治期の仏教界は、未曾有の神仏分離や廃仏毀釈、また熱烈なキリスト教の伝道を目の当たりにし、各宗こぞって民衆への説教・演説に力を入れ始めた。真言宗でも従来の説教軽視の風を改め、宗団全体を挙げて大衆布教に取りくむようになった。<sup>(3)</sup>

欧米から様々な文物・文化がもたらされ、民衆の趣向や生活様式が大きく様変わりし、仏教を含めた伝統文化を軽視する風潮が生まれてきた。このような潮流の中で、旧来の説教法<sup>(4)</sup>ではなく、時機に適した説教法を求め、<sup>(5)</sup>る機運もまた生じた。

昔は和漢の言説・譬喩のみにて十分に仏教を口演したりしが、今の世間は既に和漢の言説・譬喩を軽蔑し、毫も之を信従せざるの世間となれり。而して西洋の言説・譬喩は、其の是非曲直ながらも之を貴重し之を信従するの世間なり。此の世間に大導師として仏教を弘通する者、豈に深く時勢・人情を推移して以て仏教を敷衍するの覚悟なかるべけんや。<sup>(5)</sup>

このような機運の中で、明治一五年（一八八二）頃より、宗派を超えて汎用可能な「説教学」に関する書籍が陸續と出版された。ここでは伝統的な説教法を土台としながらも、積極的にキリスト教宣教師の説教法を取り入

れて改良を試みたことから、「改良説教」(新布教法)と呼ばれる。「改良説教」の試みは当時、必ずしも完全に成功したとはいえないようであるが、後述するように、説教者の心得や話法について、現代でも参考になる部分が多くある。

- ① 栗田信太郎編『日本各宗仏教演説龜鑑』 明治一五年(一八八二) 競錦書屋  
 仏教演説の総論・規律を最初に示し、後に各宗の演説例を挙げる(真言宗は土宜)。
- ② 華臯大仙『各宗説教習練抄』 明治一五年(一八八二)  
 説教・講談・演説・法話の相違、習練・音声・態度等、説教の規則・注意点を明かす。
- ③ 伊東洋二郎・阪口鉄著『仏教演説達弁之術』 明治二二年(一八八八) 其中堂  
 仏教演説の資格・心得、論理法・因明法、修辭法、音声・態度・思想等を説く。
- ④ 小澤吉行著『改良新選 説教』 明治二二年(一八八九) 明教社  
 説教の秘訣として音声・論理学を取り上げ、「説教門(真言宗は青木栄豊が担当)」「法話門」として実例を挙げる。
- ⑤ 小澤吉行著『賛題因縁 説教之栞』 明治二二年(一八八九) 其中堂出版  
 説教の実例として各種のテーマに即した仏典の記述・格言、因縁等を挙げる。
- ⑥ 森 貴之著『仏教各宗 新説教』 明治二二年(一八八九) 其中堂出版  
 学術との関係、音声や態度を取り上げ、各宗説教の実例を挙げる(真言宗は吉堀慈恭が担当)。
- ⑦ 澤吉行著『西洋因縁 説教之栞』 明治二三年(一八九〇) 其中堂出版  
 説教の実例として、各種のテーマに即した西洋の学説・因縁等を紹介する。

⑧加藤熊一郎（加藤咄堂）著『最新 応用説教講義』 明治三十六年（一九〇三） 森江書店  
 総説・要素・組織・修辭・練習に分けて説教を体系的に説き示す。

⑥『仏教各宗 新説教』では、説教学を出版した理由について次のように説明している。

人あり或は曰く、凡そ人に弁・不弁あるは天性に出でて、而して学習に得らるべき者に非ずと。此の説、一理なきにしもあらず。然れども遂に其の一を知て、其の二を知らざるの憾なき能はず。蓋し説教術は学習に由て上達する者なり。<sup>8)</sup>

すなわち、人には生まれながらに弁・不弁の差があるとし、高尚な信念があっても弁舌が伴わず想いを伝えられない者もいれば、深い考えがなくても能弁により人を感動させる者もいるという。「説教学」では、このような弁舌の差を認めた上で、世間の学問・技術と同様、説教術も学習により上達可能であることを強調し、発刊の事由としたのである。

以下、明治期における説教の目的・信仰との関係を明確にした上で、説教前と説教時に二分して、説教者の心得や話法の要点をまとめてゆきたい。

なお引用文は、読みやすさを優先して適宜、助字や句読点等を補い、変態片名等も通用の仮名に改め、難読語には必要に応じて平仮名でルビを付した（カタカナのルビは、引用元におけるルビを反映）。

### 三、説教の目的と信仰

僧侶は仏事に前後して慣例的に説教を行ってきたが、果たして説教の目的とは何であろうか。④『改良新選

説教』では、仏教の弘通によって淨菩提心を発させ、安心を決定させるのが目的とし、その達成には聴衆の感動が必然であると強調している。<sup>10)</sup>

⑧『最新 応用説教講義』では、説教の目的として教義の宣伝と、それによる信心の鼓舞を挙げており、未信者ならば信仰を發させ、すでに信者ならば強固な信仰へと導くべきとしている。<sup>11)</sup> 信心を發させるためには、奥深い教えを誰にでも分かり易く説くことが大切であり、その方法を研究するのが説教であるとしている。<sup>12)</sup> しかし、説教の理論・方法論があれば、万事解決というわけでは決してない。

如何に其の論が高く、其の言が美しかつても説教者、其の人に信仰の念がなかつたならば、到底、説教たる目的を達することは出来ませぬ。<sup>13)</sup>

本来、仏法を知らない者に説教を行つても、その妙味は万分の一も伝えがたく、説教者自身に確固たる信仰がなければ、いかに弁舌巧みに高尚な話をしようとも、聴衆を感化することは難しいという。自己の信じているを説教し、他に信心を發させることは容易そうに見えて、実際は困難であるという。<sup>14)</sup>

⑥『仏教各宗 新説教』でも弁舌以前に、説教を志す者に揺るぎなき自分の信念がなければ、説教の価値はないと断じている。

如何程、弁舌が爽快なるも自己の作説・意見なくんば何の用をか為さんや。『礼』に「鸚鵡、善く談ずるも飛鳥を離れず」との格言に漏れず。成る程、鸚鵡は発音を教へられ、又た善くすべし。而して談論に至りて此の如く才なく意なくんば少しも価値なきなり。夫の他人の説を以て之を衆人の前に於て弁ずる者の如きは、概ね皆な智識なく気力なき説教者のみ。何となれば自己の作説・意見なき者なればなり。<sup>15)</sup>

他人の説教をまねる者は、あたかも鳥のオウムのようにであるとし、説教者は自分の考えを確立するために、粘

り強く勉学に励むべきとしている。

#### 四、説教前の準備と心得

##### (a) 説教と勉学

各種の「説教」では、説教の基盤として勉学・学問の必要性を強調している。

② 『各宗説教習練抄』では、説教者が懸河けんがの弁（勢いよく流れる河のように弁舌を振るうこと）であつても、学問がなければ礎石なき家屋のようなもので、「甚だ危し」としている。<sup>17</sup> このような説教者は、知識人や学者を目の前にすると恐れ、気後れし、たちまちに説教が乱れてしまうという。また、いかに弁舌巧みであつても、内容が伴わなければ嘲笑されるとし、それは説教者の恥にとどまらず、仏祖を穢すことになると警告している。<sup>18</sup> それゆえに説教者は、話す内容の真偽、情報源をよく吟味するためにも、「先づ学問を急務とすべし」と断じている。

⑧ 『最新 応用説教講義』では、説教者が修めるべき学問について、教義の宣伝を理由に「宗門学」を第一に挙げている。<sup>19</sup> 新旧聖書のみキリスト教に比べると、仏教の宗門学は多様であり、習得は難しいとしながらも、最初に宗門の肝要なる書籍、次いで通仏教の書籍を順に研究すればよいとし、「説教者は生涯学問を離れることは出来ないであります」と誠めている。<sup>20</sup>

また、宗門学のみならず、天文・地理・物理・化学・鉱物・植物・動物・生理、経済・政治・法律等の百般の学科も、全て説教の材料になるとして学習を勧めている。<sup>21</sup> その他にも言語を練習するために国語の傑作を読むこと、宗教と迷信とを見極めるために哲学の学びを勧めている。<sup>22</sup>

さらに説教者は学問のみならず、宣教師に見ならつて、世間の人々とよく交流して人情をよく観察し、土地ご

との風俗・慣習に熟知すべきことを勧めている。<sup>(23)</sup> 有名な説教者は、行った先の(一)地理の概略、(二)教育の程度、(三)商工業の状況、(四)主要なる物産、(五)寺院の配置、(六)外教の状況、(七)人情風俗、(八)歴史の概略、(九)主要なる人物、(十)政治上の形勢等をよく観察し、それを踏まえて説教を練るという。<sup>(24)</sup>

②『各宗説教習練抄』でも、説教には「転迷開悟の出世間法」と「勧善懲悪の世間法」の両面があるとし、特に後者において説教者の様々な経験・見聞が役立つとしている。<sup>(25)</sup> まさに説教者は、宗門学を根幹としながらも、世間の学問知識、日常の経験等も疎かにせず、両者を交えながら説教するのが理想といえよう。

### ⑥ 説教の習練法

説教者は学問を積めば、すぐに説教ができるわけではなく、手順を踏んで説教に慣れ、習練してゆく必要がある。<sup>(26)</sup> ②『各宗説教習練抄』では、説教者の習練について七種の規則があるとしている。

#### 一、立志

二、勉強…才能や素質の有無にかかわらず必要。

三、暗記…先人の軌範や内容を千読万誦して、一言一語も加減せずに暗記する。暗記習練すれば、弁舌が快爽となり、どもったり、言い止まったりがなくなる。

四、慣座…<sup>ザニナル</sup>座を重ねて説教に慣れる。また説教の長短や優劣を識別し取捨する。慣れてくると慚愧(しづか)がなくなり、自由自在に言葉が出るようになる。

五、他聞…他の説教をよく聴聞する。妙言を記憶し、弊習(いづくな)を取捨する。

六、強膽…<sup>こつたん</sup>膽を大きくする。絶えず教場に昇るとともに、様々な知識・経験をつけることによって剛強・不屈の

心構えを身に着ける。

七、談笏だんしやく：説教の手笏てしやく（備忘録）。知識や経験を記載して一巻の談笏を作り、秘蔵し説教に備える。

上記を補足すると、②『各宗説教習練抄』、⑥『仏教各宗 新説教』では、「四、慣座」について、最初から弁舌巧みな者はごく稀であり、著名なる説教者も初めは未熟であり、失敗と苦勞を重ねながら、徐々に話術を上達させてきたとしている。

古今、説教家の有名なる者を將もつて観るときは其の大半は皆な失敗に由て上達したる者たるを知るべし。然れども勉強することなくして、而して初めより能く弁論せし者に至りては、蓋し甚だ僅少なり。<sup>27)</sup>

⑧『最新 応用説教講義』では、座に慣れる基準を百座とし、千座やれば上手となり、さらに千座、二千座、五千座、一万座と座を積み重ねるにつれて説教が熟達すると述べている。<sup>28)</sup>

説教の習練は、必ずしも説教本番に限られたものではなく、平素の会話もまた重要な契機になるとしている。②『各宗説教習練抄』では、平素の会話において説教の言葉や内容を含ませるようにして、それが他人に受け入れられるか、その反応を注意深く観察すべきとしている。<sup>29)</sup> また⑧『最新 応用説教講義』でも、平常の会話に疎かにすると、説教時に知らず知らず悪い癖が出るとし、常日頃から説教者は言葉遣いや話題の選択等について注意を払うべきとしている。<sup>30)</sup>

次に「五、他聞」に関して、⑧『最新 応用説教講義』では、「大家の説教を多く聴くことが必要<sup>31)</sup>」として、名人の説教を多く聞くことを勧めている。ただし、前述のごとく他の模倣に終始しては意味なく、「説きやうの工夫をするには、多く聴くのが一番<sup>32)</sup>」とあるように、他を参考にして工夫し、自らの説教術を磨くことが重要



である。また同書では、多く説教を聞いても実際に説教しなければ、説教の批評ができるだけで、説教は上達しないと注意している。<sup>(33)</sup>「六、強膽<sup>ごうたん</sup>」については、後の「説教の心得と威儀」の項で取り上げたい。

最後に「七、談笏<sup>だんしやく</sup>」とは、説教の題材を書きとめた「備忘録」のことである。<sup>(34)</sup>⑧『最新 応用説教講義』では、説教者が読書し学んだことや、見聞きした人情・風俗について備忘録を作り、これをくり返し読み、記憶して説教の材料にすべきとしている。<sup>(35)</sup>その際、情報を鵜呑みにせず、細部に至るまで真妄を精査すべきことは前述の通りである。

さらに備忘録等を元に、自分で説教のための「腹稿」を作るべきことも勧めている。<sup>(36)</sup>⑥『仏教各宗 新説教』では、老練の説教の大家であつても、一言一句を誤らぬように腹稿を持つて説教することを挙げ、初めて説教に臨むならば、なおさら腹稿を作るべきとしている。<sup>(37)</sup>⑧『最新 応用説教講義』でも、腹稿にもとづく練習を勧め、「弁舌のみに依頼して腹稿のない演説は決して成功するものではありません」と断じている。腹稿の文<sup>(38)</sup>体は、実際に聴衆に對することをイメージしながら書くことが望ましいとしている。

⑧『最新 応用説教講義』で「説教に熟達する方法は別がない。多く学び、多く考へ、多く聞き、多く説くのである」<sup>(39)</sup>と述べるように、意識して日常の中に説教の材を求めて備忘録を編み、さらに腹稿を作成して、積極的に説教に臨み続けることが重要といえよう。

### ◎説教者の人柄と生活

説教を志す者には、いかなる素養が求められ、どのような生活をすべきなのだろうか。②『各宗説教習練抄』では、説教者が兼備すべき要素として七種を挙げている。<sup>(40)</sup>すなわち、篤実<sup>(自らよく謹み、品行方正である)</sup>、信心<sup>(他に信心を得させるために、まず自ら信心・善提心を発す)</sup>、

学問（本宗の宗旨を詳しく学び、さらに内外に博覧である）、才智（人の器量、事に臨み、機に応ずる）、卓見（人の威徳、言行ともに高尚、厳肅）、音声、健康である。天下に著名なる説教者には、自らを正す強い信心があり、品行方正、学問博識、音声爽快、弁舌懸河、容貌温和、誰にでも等しく接することから、人々は草が風になびくように帰服するといふ。<sup>(41)</sup>

また同書では、説教者は信仰にもとづき、平素いかなる生活を送るべきか、同様に七種を挙げている。<sup>(42)</sup> すなわち、真正（世事に浮かれることなく、機心せず、懐み深く生きる。議論や怒り等を避ける）、行儀（起居動作を、厳肅にする）、正服（衣服を正しくする）、拝受（布施・信施を丁寧に拝受する。布施の多少、厚薄を問題にしてはならない）、余閑（説教の余暇、雑談や娯楽を避ける）、避俗（事務や仲裁、金銭・婚姻等）、遠酒（飲酒で乱れぬように、飲み、色欲も避ける）である。

説教者では、弁舌のみが勝れるを善しとせず、説教者の人柄や信仰、また生活態度より、にじみ出てくるものを真の説教として重視しているようである。

#### ④ 説教の形式

説教者が「腹稿」を作る際、いかに説教を組み立てればよいのだろうか。説教は古来より法説・譬喩・因縁の三段形式を基本とし、<sup>(43)</sup> 明治期の各種「説教」もこれを踏襲している。<sup>(44)</sup> 『最新 応用説教講義』では説教の形式について詳述し、一、賛題、二、法説、三、譬喩、四、因縁、五、結勸の五つに分けて解説している。

「説教の組織」 ㊦ (8) 『最新応用説教講義』 (10六頁の図にもとづく)

注意	修辞	材料	目的	賛題	序説	法説	譬喩	因縁	結勸
簡にして明なるを撰ぶべし	音調は緩なるべし	仏典・祖録、并に高僧・碩徳の詩歌	自己の職責を明にし、且つ一種の權威を与う	法説を誘導す	教義の伝播	法説を解説し易からしめ、且つ趣味を深からしむ	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	勧誘して信仰を起さしめ、又、信仰を堅固ならしむ	
冗長に渉る勿れ	緩にして次第に急。初めは声低く次第に高くすべし	俗談 平話	法説を誘導す	教義の伝播	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	
倦怠せしめざるの注意を要す	平易にして明晰	仏典・祖録等によつて賛題の主意を解説し、一切の外典によつて其の真理を証明す	教義の伝播	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	
陳腐なるを避け適當なるを撰べ	緩急抑揚に注意すべし	仏典・祖録、并に外典は勿論、日常の見聞	法説を解説し易からしめ、且つ趣味を深からしむ	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	
同上、并に二個以上の因縁を用いる勿れ	尤も音調・修辞の注意を要す	同上・史伝・漫筆・新聞・雑誌の記事	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	
論武を一転すべからず	流麗にして急なるべし	法説の要義	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	法説を証明し聴者を倦怠せしめざらしむ	

「一、賛題」とは説教のタイトル(4)のことで、説教の主意と深く関わる。賛題には、説教者の言葉に權威をもたせるために經典・祖録・和歌・詩偈の文句が相応しく、特に自宗の祖師の言を引くのがよいとされる。賛題は簡潔明瞭で時勢に合うものがよく、賛題から離れすぎて支離滅裂にならぬよう、説教者は注意すべきとしている。平素の読書にもとづき、「賛題集」を作ることにも勧めている。

「二、法説」は説教の主意であり、説教の根幹となるべきものである。<sup>(45)</sup> 法説は専ら「宗門学」を基本とするが、学問や世間学を応用してもよいという。法説には、賛題の言をもとに一々解説するやり方、主意をもとに賛題を離れて自由に弁ずるやり方の二種がある。法説を展開してゆくのに、演繹（初めに原理を挙げ、その後で説明する）、帰納（個々の事例を挙げて、最後に原理を示す）という論理法も活用可能としている。<sup>(46)</sup>

法説の導入（序説）には、談話（日常普通語）、平叙（直ちに賛題に）、破題位（賛題を離れて直ちに）という三種があり、説教を連日行う場合には、ローテーションさせるのがよいという。導入では沈静なる言葉を遣い、無駄な理屈や修飾語を用いず、口上が冗長にならぬように注意すべきとしている。

「三、譬諭」とは、たとえ話である。<sup>(48)</sup> 無味乾燥、難解になりがちな法説の主意を分かり易く補う効果がある。<sup>(49)</sup> 譬諭は身近な題材がよく、それを斬新な視点で簡潔明瞭に用いるのがよいという。譬諭を集める上では日常の観察が重要となるが、そのみで適した譬諭を充足させることは難しい。そこで積尊が用いた譬諭、具体的には、『法句譬諭経』『僧祇律』『百諭経』『雜宝藏経』『雜阿含経』『法苑珠林』『大智度論』等の仏典を参考にすることを勧めている。その他にも『譬諭抄』『沙石集』等の仏書、また『淮南子』『莊子』等の外典、西洋の『イソップ物語』等も役立つという。

「四、因縁」とは法説の正しさを証明するために、事実談を引用することである。<sup>(50)</sup> 旧来の説教では、奇怪・荒唐無稽な因縁が多く用いられたが、「説教学」では高僧や碩徳の逸話、仏教篤信者の美談が最適であるとしている。また歴史上の英雄・豪傑の逸話や、新聞記事も適しているという。説教において因縁を主にしすぎると落語や講談となり、説教としての品位を失うため、あくまでも因縁は法説の例証にとどめるべきともしている。

これらの譬諭・因縁の部分では、適度に「滑稽法」を用いることも勧められている。<sup>(5)</sup> 『仏教各宗 新説教』

によれば、一本調子の説教では死談となり、聴衆を飽きさせるから、あえて主意と反対の言葉、滑稽法を使い、説教の勢いを付けるべきとしている。<sup>(51)</sup> ④『改良新選 説教』でも滑稽法の価値を認めつつ、卑しく、浅はかな滑稽話を避け、また冗長にならぬように注意している。<sup>(52)</sup> 法説が根幹とするならば、譬喩・因縁は枝葉であり、法説の主意を引き立てるため、譬喩・因縁を適宜に用いるといえよう。<sup>(53)</sup>

さらに⑧『最新 応用説教講義』では、古来の詩歌・俳句を引くと、乾燥に流れやすい法説を補い、優美な趣きになるとしている。ただし詩歌・俳句でも説明的なもの、平凡なものとは不適であり、高尚すぎて説明を要するものも避けるべきとしている。また地口・洒落の類を用いるのもよいが、他人を嘲るようなものは説教に向きとしている。

「五、結勸」とは説教全体の結びである。結勸の目的は、説教全体の主意を完全に一致させること<sup>(54)</sup>、聴衆の信仰を鼓舞し高めること<sup>(奨励の)</sup>の二つだという。ここでは壮健かつ簡明な言葉遣い、語勢よく急に語することを勧めている。毎回、同じ結びをくり返すと、聴衆は「またか」と説教の効力が薄れるため、工夫すべきともいう。

以上が説教の基本的な流れとなるが、その用途に応じて、法説・譬喩・因縁等を組み替えてもよいとし、三つのやり方を提示している。<sup>(55)</sup>

- |         |              |            |            |
|---------|--------------|------------|------------|
| ① 綱領一段格 | ・ ・ ・ 法説の大主意 | ▽▽▽ 譬喩・因縁  | ▽▽▽ 結勸の辞   |
| ② 鶴膝格   | ・ ・ ・ 譬喩・因縁  | ▽▽▽ 法説の大主意 | ▽▽▽ 譬喩・因縁  |
| ③ 曲折法   | ・ ・ ・ 譬喩・因縁  | ▽▽▽ 譬喩・因縁  | ▽▽▽ 法説の大主意 |
- また各段の組み立て方について、対照<sup>(自他の相違を比較して明確にする)</sup>、反復<sup>(言葉を変えながら同意旨をくり返す)</sup>、層進<sup>(次第の論展)</sup>を取り入れると、説

教に幅が出るとしている。

以上が説教の基本形式であるが、実際には玉石混交、様々な説教が行われたようである。②『各宗説教習練抄』では、世間で広く行われる説教を七種に分類している。すなわち、学談（学者の説教、聴衆は喜ばないが法尾をひく）<sup>56</sup>、実談（精奥如法なる説法、信心・道徳によつて人を惹き、勝劣や事物の利害等を論じる）、権談（本寺本山からの派出説教。学問・弁舌に、関係なく、権威を背景として尊敬される）、売談（詐欺・俳優なる説教。奇、説・怪談で人を喜ばせる）、野談（民間に徘徊しての談・不思議等を用いる）、奸談（「生き仏」と自称し、仏教を売り物にする）である。

学談・実談・講談等は、それぞれ説教の一家をなしているが、自らの説教に固執するあまり、名談に達し得ないという。売談・野談・奸談は「不浄説法（仏法を仮りて利を求めること）」であり、あるまじき説教と批判している。説教者は高慢や名利に迷い、自らを誇つて他人を妬み、妄説の主張に陥りやすいとして注意を促している。<sup>58</sup>

## 五、説教時の心得

### ① 説教における心得と注意

いざ説教に臨む時、説教者はいかに心がけ、どのような態度をとるべきであろうか。②『各宗説教習練抄』では、まず説教場となる仏前をよく荘厳し、仏や祖師の加持力（＝加持力）を仰ぐべきとしている。<sup>59</sup>④『改良新選 説教學』では、古人の言「信は荘嚴より起るの徳なり」を引いて、説教者は法座に登る時、衣服に気を遣い、よく荘嚴に勤めるべきとしている。<sup>60</sup>よく荘嚴された雰囲気は、説教者自身の信心を高め、同時に聴衆の信心を発起させるものといえよう。

説教の次第については②『各宗説教習練抄』に詳しく、以下としている。<sup>61</sup>

出仕(る場に出) → 仏拝(仏尊を) → 昇座(高座に胸を) → 衣紋(法衣動作を正し、聴衆の状態を観察す)  
(る)後に適宜、十念・誦歌等を唱える  
 ↓ 応説(聴衆の性質に応じて語) → 中休 → 退座  
(を取捨して説教する)  
 ④『改良新選 説教』でも同様の次第であるが、説教前に三宝礼・奉請・散華・三帰三竟・四恩・十善戒・開経偈、説教後に四弘誓願・回向の経文を加えている。<sup>(62)</sup>

説教に臨んで心がけるべき点は種々であるが、第一に挙げられるのは仏陀の使者、代理として説教するという気概であろう。⑧『最新 応用説教講義』では、説教者は仏陀の使者として態度を正すべきとしている。<sup>(63)</sup> すなわち顔を端正にたもち、眼を泳がさず、数珠や扇以外の余計な物を持たず、身体を無駄に動かさず、静かに説教を始めるべきとしている。また仏陀の代理なのだから、説教者はいかなる聴衆にも、決して怯えたりしてはならないという。<sup>(64)</sup> その意味において説教者には信念に加えて、沈毅(ちんぎ)(落ち着いていて物、事に動じないこと)、大膽(だいたん)(度胸がすわつ)が必要としている。度胸もまた人によって差異があるが、②『各宗説教習練抄』によれば、絶えず説教に臨みつづけて場に慣れ、また種々の事情・人情に精通することにより、自ずと度胸がつくものとしている。<sup>(65)</sup> また、どうしても心が散乱するならば、著名な説教者の事例として、説教前に数息観を行うことを勧めている。<sup>(66)</sup>

次に説教を展開する中で、気を配るべきは「応説」である。応説とは、いわゆるアドリブであり、会場や聴衆の性質・状態を推し量り、その場に相応しい法を説くことである。②『各宗説教習練抄』では、教場の広狭に合わせて声を発し、また聴者の智慧・雅俗・信不信等を見きわめて話題を取捨選択すべきとしている。⑧『最新 応用説教講義』でも、「世尊の教法は万代不易の真理」ながらも、説教は時機に応じることが肝要としている。<sup>(67)</sup> ただし、著名な説教者の口伝によれば、応説は説教の細部に限定されるものであり、決して説教の柱礎と

なる部分を変えてはならないという。「説教の古来より難しとするは応説の一にあり」という言に象徴されるように、応説は至難の技であり、説教者の経験・センスが重要になるであろう。

また②『各宗説教習練抄』では、「説教は説教者の語るにあらず。説教は聞者より語らせ令る者なり」という古人の言を引いている。説教者は絶えず聴衆の様子に注意を払い、相手が望むものを察知し、聞き取りやすく爽やかで、感動をもたらすような説教を心がけるべきなのである。<sup>70</sup>

次に説教の内容については「宗門学」が主であり、絶対に疎かにしてはならないという。②『各宗説教習練抄』では、説教者は自他内外の教えを弁まえつつも、「本宗開祖の宗旨を確守」することが本分であるとし、むやみに他宗他派の言葉を交え、自宗の教えを乱してはならないとしている。<sup>71</sup> また、聴者の興味をひくためとはいえ、自宗の教えを損害するような因縁・譬喩・詩歌・古語等を決して用いてはならないと禁じている。<sup>72</sup> ⑧『最新応用説教講義』では、「異宗攻撃は説教に於て最も見苦しいもの」とし、あくまでも説教は自己の信仰、自宗の教えを伝えることに徹すべきとしている。

次に説教の言葉に関する注意点について触れておきたい。⑥『仏教各宗 新説教』では、説教者の言葉が不明瞭（語句の不明）、かつ不十分な内容（意義の不足）だと、聴衆に自力での理解を強いるので避けなければならないとしている。<sup>73</sup> これらの不備を補おうと、説教者がいかに声を大きくしようとも意味がないという。

説教の言葉を明瞭にするためには、文字の音訓の使い分け、文の「て・に・を・は」、説教の言い回しに慣れること（読付）が肝要としている。<sup>74</sup> また聴衆を嫌な気持ちにさせないために、「語句の重複」「説教の冗長」の



二事にも注意すべきとしている。<sup>76</sup>⑧『最新 応用説教講義』でも、「下手の長談義は退屈の本」と述べ、いかなる説教上手でも長くなれば聴衆は嫌な気持ちになるとしている。<sup>77</sup>その上で、西洋の雄弁家や真宗僧侶の事例を引き、説教の時間は三〇〜四〇分を適度とし、もし長く行う時には二座に分割するのがよいとしている。

また⑧『最新 応用説教講義』では、「ただ他人に解し易く語るばかりが説教の能ではありません。ただ解っただけでは深く信ずるといふ心の起るものではありません<sup>78</sup>」とした上で、明晰かつ優美、健やか（勁健<sup>はげけん</sup>）で勢いのある言葉遣いが必要と述べている。

明晰な説教のためには、まず自身の考えを明確にする必要がある、その上で正しい文法、言葉を使う必要があるとしている。具体的には、安易に外国語・地方語・専門語・死語・造語や、また曖昧・冗漫なる言葉や省略を避けるべきとしている。また説教を優美、健やかにするためには、言葉や思想において変化・抑揚、統一・調和のバランスが大切としている。

春夏秋冬の変化のある中に統一のあるのが宇宙の状態でありまするので、説教者も一座の中には、此の變化と統一とを以て此の語調を修練せねばなりません<sup>79</sup>。

また優美に語るならば、サ行・ナ行・ハ行等の長音の語、健やかに語るならば、カ行・ラ行・タ行等の短音の語を用いるのが原則であり、様々な修飾、修辭を駆使するのもよいとしている。

### ⑨説教の語法・話術

説教の目的は聴衆に信心・安心を発させることであるが、そのためには感動させられるか否かが重要となる。各種『説教』によれば、説教の感動を高める上で大切なのは「音声の變化」であり、高低・強弱・昇降・緩急・

遅速等、音声の用い方こそが説教の秘訣であるとしている。<sup>(84)</sup> いかにも卓越した説教内容でも、抑揚なく話し続けるならば、決して聴衆を感動させることは難しい。<sup>(85)</sup> また、古来より大声で説教する者も多いが、これも抑揚がなければ聴衆を不愉快にさせ、説教者も無駄に疲労し、声を枯渇させるのみという。<sup>(86)</sup> そうかといって、むやみに音声を変化させても効果はなく、適切な音声の用い方を修めるべきとしている。

②『各宗説教習練抄』では、音声には大別して、常声・仮声・成声の三種があるとしている。<sup>(87)</sup> 常声とは平話に用いる声、仮声とは叫喚・驚愕等の非常時に用いる声、また成声とは練習の功勞により造り成した声であるという。このうち、説教に相応しいのは成声であり、「成声に<sup>ツクリゴエ</sup>あらずんば<sup>ツクリゴエ</sup>発声、忽ち<sup>ソドカワキカレ</sup>疲労を生じ<sup>ソドカワキカレ</sup>咽喉乾涸して<sup>ソドカワキカレ</sup>渋滞す」とし、説教を志す者は先んじて説教に向けた声を習練すべきとしている。

その上で、発声する時の注意点として七つを挙げている。すなわち、胸張<sup>ムネツハリ</sup>（胸や腹をよく開張し、前に）、語息<sup>ゴク</sup>（説教を<sup>ゴク</sup>が、自然に語息として<sup>ゴク</sup>音声<sup>ゴク</sup>を補給する）、応席<sup>オウジヤク</sup>（教物の広狭や聴者の多少に応じて音声語勢を選ぶ）、音调<sup>イントウ</sup>（音声作用に深く注意しながら、遅速）、態度<sup>テイト</sup>（言葉の情感に応じて、適宜、身ぶ<sup>ミブ</sup>り、手ぶり等の動作をおり混せる）、段落<sup>ダクラク</sup>（聴者にも明らかなように、説教内容に段落を設ける）、養生<sup>ヨウジヤウ</sup>（平素より飲食の時間や種類に注意）である。<sup>(88)</sup>

各種「説教」では、上記のうち「音调」をめぐって、喜・怒・哀・楽の情感にあわせて説教の声色を使い分けることを勧めている。例えば、④『改良新選 説教』では、高声は特別な語意を強調する時や感情の変転を表する時、また壮快あるいは怒る場面で用いるのがよいとしている。恨みやごう慢、逆に大喜びする場面では且声がよく、また悲壯、失望する場面では低声、娯楽や感服する場面では、通常音が相応しいとしている。<sup>(87)</sup>

⑥『仏教各宗 新説教』では、音调を変える意義を認めつつも、それが表面のみに留まるならば、やはり聴衆を感動させられないと指摘している。

今、聴衆を感動せしめんとせば、音调を喜・怒・哀・楽の四情に応じて適宜に作用するを以て第一とす。

然れども表面のみに之を為さんとして心中、此の四情を感想せざれば其の説教たる決して他人に卓越せる妙美の絶境に達する能はざるは論を待たず。反て鄙野の説教たらんのみ。<sup>88)</sup>

## 六、まとめ

本論では明治期に出版された各種の「説教」に注目し、説教の心得や話法について取りまとめた。今から百年以上前に出版されたものであるが、その説教の理論や技術は今でも応用可能であり、また説教者が決して忘れてならない心得に関する金言もまた散見された。

その中でも、説教は知識や技術のみで即座に上達するものではなく、強い意志を持ち、生涯にわたる研鑽によつてのみ上達可能という視点は特に重要であろう。ややもすれば安易に他の説教をまねて、その外形を取り繕うのに終始しがちになるが、説教者自身の信念、信仰が伴わなければ、決して聴衆の心を動かす説教はできないという。

では説教の上達を志す者はいかにすべきであろうか。各種の「説教」の提示する方法を整理すると以下となる。説教向上に資することになれば幸いである。

- 生涯にわたり学問を研鑽する（宗門学が根幹。あわせて様々な学問知識）。
- 人との交流、種々の体験を通じて見聞を広める（説教の材料の収集）。
- 学問知識や見聞経験をもとに「備忘録」をつくる（情報の精査も肝要）。
- 備忘録をもとに説教の構成を考えて「腹稿」をつくる。
- 備忘録および腹稿によく目を通して暗記し、言い回しに慣れておく。

- 日常の会話を疎かにせず、説教の内容や言葉が受け入れられるかを試す。
- 他の説教をよく聞いて善し悪しを研究し、自らの説教を磨く。
- 説教の内容に恥じないような生活を送り、自己の信仰・信念を確立する。
- 平素から言葉遣いに気を付け、説教に適した声（成声ソクリヴェ）を練成する。
- 失敗を恐れずに説教の場に立ち続け、経験を積んで度胸をつける。
- 仏陀の使者、代理者という自覚をもち、強い気持ちで説教に臨む。

## 註

## (一)

現代では仏教を説くことについて、「法話」「説法」「説教」「布教」等、多様な語が用いられ、あまりその差異は意識されない。しかし、明治期の各種「説教」を見ると、それぞれの語は目的や方法に応じて区別され、使い分けされたようである。「説教」ごとに多少解釈が相違する部分もあるが、その共通する内容をまとめると、「法話」とは僧侶が法要前後に簡潔に仏教を説くことであり、特に形式的な定めはないようである。次に「説教」は仏典（経論・疏釈・祖師の著書等）の言葉によって賛題・主題を定め、法説・譬喩・因縁という三段形式で説かれるものである。説教の担い手は必ずしも僧侶に限定されず、居士等の在家者が行うことも可能であったようである。次の「布教」は各種「説教」中に規定がないことから、「法話」「説教」等といった仏教の伝統とは、ルーツを異にする可能性が考えられる。

各種「説教」では特に説教について、近代日本で広く行われた演説・講義・講談・討論等との相違を明かしている。まず仏教演説を主題とする③『仏教演説達弁之術』（二―三頁）では、演説・講義・説教・討論の四種に分けている。すなわち、演説とは命題にもとづき、論理法や三段論証によって自己の意見・思想を述べる類である。講義とは経律論の三蔵の語句を詳細に解釈し、仏教の道理を説示するものである。説教とは経論・祖師等の言葉を賛題として法・譬・因の三段に説くもので、信心の勧発が目的である。討論とは自分と他者とが相对議論して是非・正邪を批判しあう類のものである。このうち演説のみが西洋由来で明治期に導入されたものであり、他三種は日本古来のものとして  
いる。

次に②『各宗説教習練抄』（三丁右―七丁右）では、説教中に説教・講談・演説・法話の四体があるとし、話者は四

体をよく識別して、決して混同せぬように注意している。まず説教体とは、仏前で因縁・譬喩等を交えて法を丁寧弁解するもので、聞者を心服流涕させるのが目的となる。講談体とは、演説体に類似する近来の一体で、仏前以外の場所で行う。教法の勝劣・是非、事物の利害・得失を弁解し、事実証拠を論決するのが目的であり、全く法味がないから、僧侶は平素用いるべきではないとしている。演説体とは本寺・本山による派出布教や、囚人教誨等に用いるものである。法話体とは一言の談話であり、家族や病人等の要請をうけて簡潔に法を述べる類である。

(2) 目黒隆幸『真言宗布教史』(一九五六年、『密教文化』三〇六・三三七)によれば、明治以前は、わずかに聖や六十六部が布教に類することを行ったのみで、真言宗としては布教に関する何等の制度も、設備もなかったという(一頁)。それまでの真言僧は学問的・儀式的な論議・法談を行うのみで、むしろ民衆布教に励む僧を「談義僧」として見下したという。しかし、明治維新を境に、寺院住職で教導職にある僧は、弁舌布教すなわち説教をしなければならなくなったという(六頁)。

長谷本秀『真言宗安心要義』でも、「昔は我が宗では説教などは、せなんだものであります、どういふ理由か知りませんが、真言宗は秘密の法門ぢやから妄りに在家に説き聞かすものでないと思つたものか、兎も角も説教は多くせなんだのであります」(三六頁)と述べている。

(3) 『智山年表』等参照。真言宗では、明治八年七月の一宗協議会(真言宗大教院)において布教について協議し、明治一二年一月の一宗大会(東寺)で宗意安心を統一し、「布教の体裁を一にするの件」等を議決した。さらに明治一三年六月になると、真言宗管長の三条西乗禪は、大会議の趣旨に基づき、説教の熟練者を集めて真言宗布教会議を開催し、「布教会議條款」を制定した。以後、布教会議を重ねて「布教条例」「教師派出章程」を定め、地方への布教師派遣等が行われるようになったとされる。

(4) 関山和夫著『説教の歴史—仏教と話芸』では、伝統的な説教法を代表するものとして「節談せうだん説教」を挙げている。節談説教とは、独特な節回しとともに情感豊かに語られる話芸の一種で、特に真宗で盛んに行われた。節談説教は明治期以降、宗内で批判を受けるようになり、同時に娯楽やマスメディアの発達によって徐々に廃れていったという。関山氏は、節談説教を高く評価しており、その伝統を礎として「新時代の布教法」を樹立すべきと提言している(同書二〇二頁)。

(5) ④『改良新選 説教』五頁。時代に合った説教を志しても、拠るべき師や書籍はなく、それが「仏教社会の欠曲」であると断じている。このような問題意識のもと、撰者は数多くの書籍、各宗学匠の意見をまとめて「説教」を編集したのである。⑥『仏教各宗 新説教』序文でも同様の趣旨が述べられるが、さらに実際に若い僧侶(雛僧)に説教をや

らせ、「説教学」の内容を二層洗練したとしている(⑥二頁)。  
 (6) ④『改良新選 説教学』では「西洋諸邦の説教学をも参酌し(十六頁)」、また⑥『仏教各宗 新説教』では「現今第一等の説教家と称せらるる米国宣教師ムーデー氏の説教学を通覽し大に覚る処あり(四頁)等と述べられる。

(7) 関山和夫『説教の歴史—仏教と語云—』一八六頁。

説教の内容についても節談説教をきらって新しい布教法を實踐すべきだと主張するものが続々とあらわれた。しかし、説教と学問は本来異質のものであるため、改良説教(新布教法)をいくら唱えてみてもそれを唱える人の話し方技術は全く拙劣なもので、著述を通じて彼らの論理や主張の新鮮味に共鳴した人々も、ひとたびその講話を聞くや忽ち落胆するものが続出する始末であった。

明治期に入り、欧米化が進むにつれて、節談説教を担う旧来の説教者が軽視され、一方、大学等で仏教を学んだ学僧が改良説教を担うようになったという。その結果、説教の内容は高度化されたが、拙劣で感銘度も薄く、我流の法話が盛行する事態を招くことになったという(同書一九九—二〇〇頁)。

信仰は学問や理屈ではない。学問と説教は別のもので、時には著しく次元を異にする。それを混同してしまったところに現代法話の最大の欠点がある。説教には常に情念が必要だ。学問・論理が優先して情念を喪

失すると感銘度が希薄になり、説教の迫力は減退する。昔に較べて現代寺院の法話の聴衆が極端に減少したのは情念喪失に起因する面がある。面白くなく、ありがたくもない難解な大学の講義のような法話の会場に宗教的雰囲気は漂わぬのは当然である。(同書二〇五頁)

関山氏の見解は、現行の説教・法話を見直す上で有用な指摘と思われる。仏教をとりまく現代の状況を考えると、情念を主体とする伝統的な説教、学問を主体とする改良説教、これら両者の融合が重要になってくるであろう。

- (8) ⑥『仏教各宗 新説教』五頁。  
 (9) ④『改良新選 説教学』一二頁。仏教演説は破邪顕正の目的に適するという。  
 (10) ④『改良新選 説教学』五頁。  
 (11) ⑧『最新 応用説教学講義』五八頁。  
 (12) ⑧『最新 応用説教学講義』五頁。  
 (13) ⑧『最新 応用説教学講義』一〇頁。  
 (14) ⑧『最新 応用説教学講義』七頁。  
 (15) ⑧『最新 応用説教学講義』六頁。  
 (16) ⑥『仏教各宗 新説教』四頁。  
 (17) ②『各宗説教習練抄』一七丁左。  
 (18) ②『各宗説教習練抄』三五丁左。  
 (19) ⑧『最新 応用説教学講義』一二頁。  
 (20) ⑧『最新 応用説教学講義』一四頁。  
 (21) ⑧『最新 応用説教学講義』一九頁。

- (22) ⑧ 『最新 応用説教講義』一八頁。  
 (23) ⑧ 『最新 応用説教講義』一八頁。  
 (24) ⑧ 『最新 応用説教講義』二二頁。  
 (25) ② 『各宗説教習練抄』一丁右。  
 (26) ② 『各宗説教習練抄』七丁左。  
 (27) ⑥ 『仏教各宗 新説教』六頁。② 『各宗説教習練抄』九丁  
 右にも同様の記述あり。  
 (28) ⑧ 『最新 応用説教講義』一四五頁。  
 (29) ② 『各宗説教習練抄』一丁右。  
 (30) ⑧ 『最新 応用説教講義』一四四頁。  
 (31) ⑧ 『最新 応用説教講義』一四六頁。  
 (32) ⑧ 『最新 応用説教講義』一四六頁。  
 (33) ⑧ 『最新 応用説教講義』一四五頁。  
 (34) ⑧ 『最新 応用説教講義』二二頁。  
 (35) ⑥ 『仏教各宗 新説教』一二頁。  
 (36) ⑧ 『最新 応用説教講義』一四三頁。  
 (37) ⑧ 『最新 応用説教講義』一四四頁。  
 (38) ⑧ 『最新 応用説教講義』一四五頁。  
 (39) ⑧ 『最新 応用説教講義』一四〇頁。  
 (40) ② 『各宗説教習練抄』一六丁右。  
 (41) ② 『各宗説教習練抄』二八丁右。  
 (42) ② 『各宗説教習練抄』二八丁右。  
 (43) 関山和夫『説教の歴史―仏教と語芸』三四―三五頁、「型の  
 伝承」参照。同書では、古い説教の型として、法説・譬喩・  
 因縁の「三周説法」を挙げ、さらに前に讃題、後に結勸を  
 加えた五段法を示している。  
 (44) ⑧ 『最新 応用説教講義』五七―六六頁。  
 (45) ⑧ 『最新 応用説教講義』六六―八五頁。  
 (46) ⑧ 『最新 応用説教講義』五五頁。③ 『仏教演説達弁  
 之術』等でも演繹・帰納の法を説く。  
 (47) ⑧ 『最新 応用説教講義』七六頁。  
 (48) ⑧ 『最新 応用説教講義』八五―一〇五頁。  
 (49) ④ 『改良新選 説教』五〇頁では、仏教の因明と論理法  
 を比較して、論理法には譬喩の要素が欠けることを指摘し  
 ている。  
 (50) ⑧ 『最新 応用説教講義』八五―一〇五頁。  
 (51) ⑥ 『仏教各宗 新説教』一〇頁。  
 (52) ④ 『改良新選 説教』五四頁。  
 (53) ⑧ 『最新 応用説教講義』八五頁。  
 (54) ⑧ 『最新 応用説教講義』七五―八五頁。  
 (55) ⑧ 『最新 応用説教講義』六九頁。  
 (56) ② 『各宗説教習練抄』二四丁右、「説教に七談の別あるこ  
 と」参照。  
 (57) 近來の学者は名利に迷い、説教者を真似るとも批判される。  
 また「学問に長ずる者は必ず説教に疎く、説教に長ずる者  
 は必ず学問に疎し」(② 『各宗説教習練抄』二五丁右)とも  
 述べられる。  
 (58) ② 『各宗説教習練抄』三二丁右、「不浄説法の罪を謹むこ

と」参照。

- (59) ② 『各宗説教習練抄』五丁右。
- (60) ④ 『改良新選 説教学』五五頁。
- (61) ② 『各宗説教習練抄』五六丁右。
- (62) ④ 『改良新選 説教学』五八頁。
- (63) ⑧ 『最新 応用説教学講義』一四六頁。
- (64) ⑧ 『最新 応用説教学講義』一一一―一二頁。
- (65) ② 『各宗説教習練抄』一〇丁右。
- (66) ② 『各宗説教習練抄』二二丁左。
- (67) ⑧ 『最新 応用説教学講義』五頁。
- (68) ② 『各宗説教習練抄』二二丁右。
- (69) ② 『各宗説教習練抄』一丁左。
- (70) ② 『各宗説教習練抄』二丁右。
- (71) ② 『各宗説教習練抄』三三丁左。
- (72) ② 『各宗説教習練抄』三四丁右。
- (73) ⑧ 『最新 応用説教学講義』七七頁。
- (74) ⑥ 『仏教各宗 新説教』六頁。
- (75) ② 『各宗説教習練抄』三四丁右。
- (76) ⑥ 『仏教各宗 新説教』九頁。
- (77) ⑧ 『最新 応用説教学講義』一四七頁。
- (78) ⑧ 『最新 応用説教学講義』二三頁。
- (79) ⑧ 『最新 応用説教学講義』三六頁。
- (80) ④ 『改良新選 説教学』序、② 『各宗説教習練抄』一三丁右。

- (81) ⑥ 『仏教各宗 新説教』七頁。
- (82) ② 『各宗説教習練抄』一二丁左―一三丁右、⑥ 『仏教各宗 新説教』八頁。大声の説教では深い意味を含蓄することができず、会場が喧噪騷擾なるのみとしている。大声だと聞き取りやすく、感動を与えやすいという考えは全くの誤解ともしている。また低声の説教もまた聴衆を、一層不愉快な気持ちにさせるという。
- (83) ② 『各宗説教習練抄』一二丁左。
- (84) ② 『各宗説教習練抄』一一丁左。
- (85) ⑥ 『仏教各宗 新説教』一〇頁では、身振りは説教者の意思を示し、「説教術に非常の勢力を付するもの」とした上で、拳手は熱心や高慢・強情、震手は騒争や血気といった感情を表現できるといふ。ただし、② 『各宗説教習練抄』一四丁右によれば、身振りを下手にやり過ぎると演戯・擬似に陥り、教場はあたかも劇場のようになるとも注意している。
- (86) ② 『各宗説教習練抄』一五丁右。説教者は飲食の時間や大声、夜更かしに注意し、酒水・焼酎、菓物、骨質なる食品(アラビヤゴキ)を避けるべきとしている。音声を快復するためには、アラビヤゴムや砂糖菓子・糊餅等がよいともしている。
- (87) ④ 『改良新選 説教学』序文。
- (88) ⑥ 『仏教各宗 新説教』八頁。